

1 事業の実績

(1) 業務概括

施設及び業務実績は、次表のとおりである。

区 分	平成23年度	平成22年度	増 減 数	増減率 (%)
給水区域人口 (人) A	284,236	284,445	209	0.1
計画給水人口 (人)	286,700	286,700	0	0
現在給水人口 (人) B	264,198	263,897	301	0.1
普及率 (%) B/A	93.0	92.8	0.2	
給水能力 (m ³ /日)	133,600	133,600	0	0
導送配水管延長 (m)	1,247,590	1,236,345	11,245	0.9
職員数 (人)	95	95	0	0
総給水量 (m ³) C	28,630,788	29,719,439	1,088,651	3.7
有収水量 (m ³) D	26,612,709	27,500,704	887,995	3.2
有収率 (%) D/C	93.0	92.5	0.5	

給水人口及び普及率等の主な増減の内容

給水区域人口は、田主丸町(一部を除く)が区域に含まれた平成20年度をピークに、わずかずつではあるが、毎年度減少している。一方、現在給水人口は本年度も微増となっているが、これは、大橋町などの未普及地域が解消されたことによる。なお、善導寺町及び大橋町に残っていた水道未普及地域については、21年度からの3か年計画で整備に取り組み、最終年度である本年度をもって概ね解消している。

給水区域人口が減少し、現在給水人口が増加したことにより、普及率は93.0%と、前年度に引続き、本年度も上昇している。

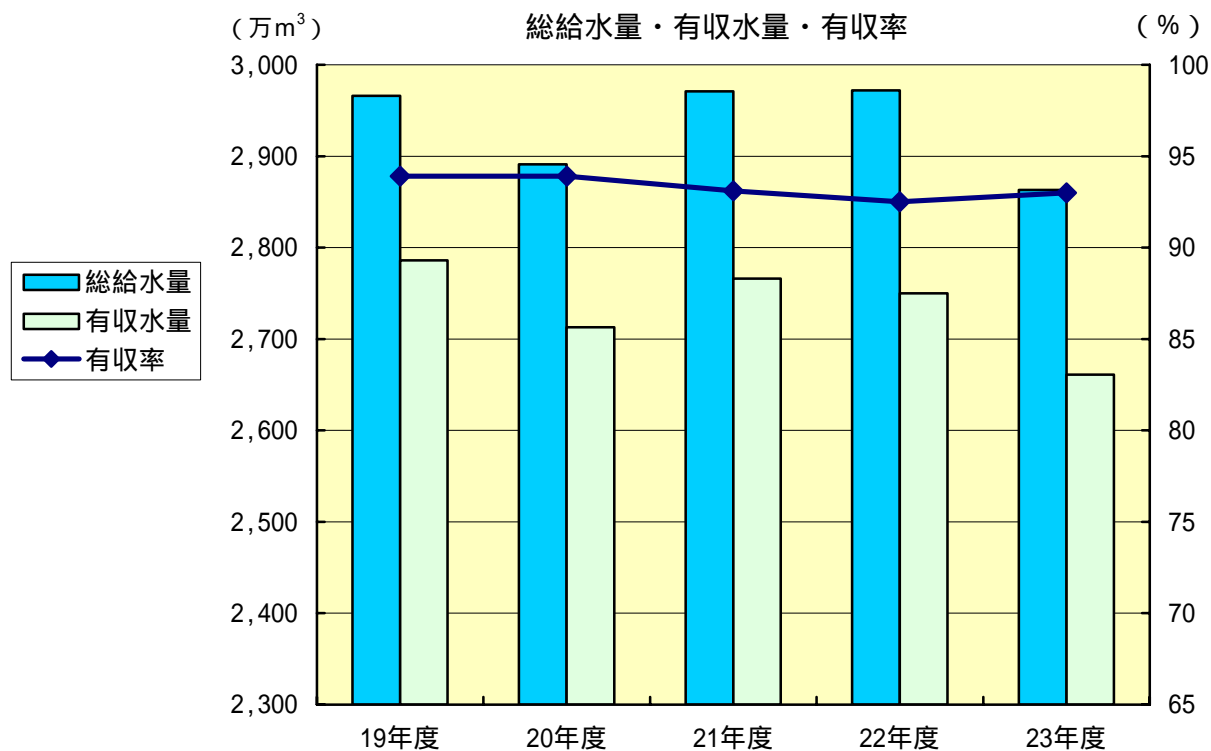
本年度の導送配水管延長の増加(11,245m)は配水管の増加によるものである。口径別に見ると、口径75mmの配水管は530m減少したが、口径100mm以上と65mm未満の配水管が、合わせて11,775m増加している。

総給水量、有収水量及び有収率の主な増減の内容

総給水量は、前年度と比較すると、1,088,651 m³の減少となっている。本年度は有効水量、無効水量ともに減少しているが、特に減少が大きいのは、有効水量では、応援給水量(526,346 m³)及び料金水量(403,556 m³)であり、無効水量では、不明水量(152,377 m³)である。応援給水量は、前年度に比べ、26.3%の減少となっているが、これは、応援給水期間が、前年度は全期間(365日間)であったのに対し、本年度は一部期間(245日間)となったためである。

有収率は、平成20年度以降低下していたが、本年度は、0.5ポイント増の93.0%である。

なお、総給水量、有収水量及び有収率の推移は、次表のとおりである。



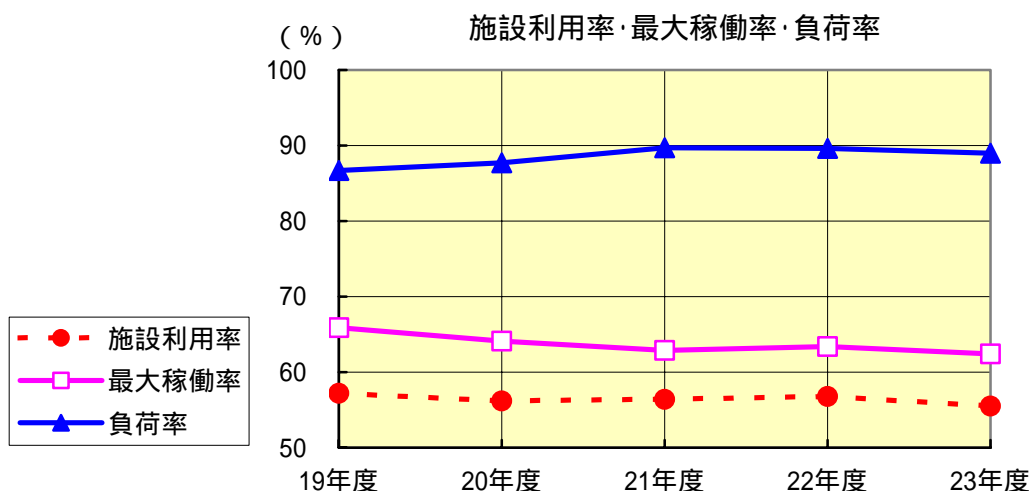
(単位: m³・%)

区分	平成19年度	平成20年度	平成21年度	平成22年度	平成23年度
総給水量	29,656,754	28,908,104	29,712,310	29,719,439	28,630,788
有収水量	27,855,415	27,133,163	27,656,923	27,500,704	26,612,709
有収率	93.9	93.9	93.1	92.5	93.0

(備考)「総給水量」及び「有収水量」には、福岡県南広域水道企業団の安定供給を確保するための応援給水量(平成19年度 1,703,538 m³、平成20年度 1,506,721 m³、平成21年度 2,186,745 m³、平成22年度 2,004,281 m³、平成23年度 1,477,935 m³)を含む。

(2) 水道施設の利用状況

水道施設の利用状況（施設利用率、最大稼働率及び負荷率）は、次表のとおりである。



(単位: m³・%)

区 分	平成19年度	平成20年度	平成21年度	平成22年度	平成23年度
1日給水能力 A	133,600	133,600	133,600	133,600	133,600
1日平均給水量 B	76,375	75,072	75,413	75,932	74,188
1日最大給水量 C	88,058	85,608	84,041	84,718	83,320
施設利用率 B/A	57.2	56.2	56.4	56.8	55.5
最大稼働率 C/A	65.9	64.1	62.9	63.4	62.4
負荷率 B/C	86.7	87.7	89.7	89.6	89.0

(備考) 表の各数値は、総給水量から応援給水量を除いて算出している。

1日平均給水量は、平成21年度、22年度はそれぞれ前年度を上回っていたが、本年度は前年度に比べて、2.3%減少し、この5か年では最も少なくなっている。

1日最大給水量は、近年の減少傾向のなか、前年度は増加したものの、本年度は減少に転じ、平成19年度と比較すると、5.4%減少している。

最大稼働率は、1日供給量が最大のときの施設の利用率を示す指標であり、施設効率性の点からは高い方が良いが、100%に近すぎると安定供給の面から問題があるとされる。近年は低下を続けており、前年度は増加したものの、本年度は増加に転じる前よりもさらに低下しており、最大給水能力の余裕は37.6%となっている。

負荷率は、施設の効率性を判断する指標であり、施設効率性の点からは高い(1日平均給水量と1日最大給水量の差がなく、需要の変動が少ない状態)ほど良い。平成19年度以降上昇していたが、前年度に下降に転じ、本年度はさらに0.6ポイント低下している。

施設利用率は、平均的な施設の稼働状況を示す値であり、最大稼働率及び負荷率と併せて、施設の全般的な稼働状況を把握することで、施設の規模が適切であるかどうかを総合的に判断するものである。この値が高いほど、施設規模は適切であり、逆に低い場合は、施設が遊休化していると判断できる。平成21年度、22年度と上昇していたが、本年度は前年度に比べ、1.3ポイントの低下となっている。前年度上昇した最大稼働率も本年度は低下しており、本市の水道施設は給水能力に余裕がある状態といえる。